

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370294

研究課題名(和文) 日本作家から探るフォークナー文学の世界性 大江、中上を中心に

研究課題名(英文) Faulkner's works as world literature examined through Japanese writers, Oe and Nakagami

研究代表者

田中 敬子 (TANAKA, Takako)

名古屋市立大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：70197440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：現在の「世界文学」が越境性やマイノリティを重視することに鑑み、ウィリアム・フォークナー文学の世界性を、彼の影響を受けた日本作家の大江健三郎や中上健次との関係を中心に解明した。フォークナーは白人南部作家として黒人に対しては主流派、北部に対してはマイノリティという複雑な立場にある。大江、中上それぞれも日本の父権社会に対し微妙な立ち位置にあるが、フォークナーの南部父権社会との葛藤は、彼らの文学的戦略にも大きな影響を与えている。さらに第二次世界大戦後のフォークナー来日が当時のアメリカの国家戦略に沿うことから、フォークナーとアメリカ文化の世界戦略と日本についても新たな知見を提出した。

研究成果の概要(英文)：World literature today takes into consideration the significance of crossing-over-the border, the relationship of minority to majority, and other racial, political, and economic issues shared in the global framework. This research re-evaluates William Faulkner as a writer of world literature through his influence on Japanese writers such as Kenzaburo Oe and Kenji Nakagami. Faulkner as a white American writer in the South belonged to majority towards the African-Americans, but minority against the North. Similarly, Oe and Nakagami, who are greatly influenced by Faulkner, respectively take a complicated position in patriarchal society in Japan. This study also examines Faulkner's role as a cultural ambassador to Japan during the Cold War days, as an example of the tie between culture and politics.

研究分野：英米文学

キーワード：フォークナー 中上健次 大江健三郎 父権制 ポストモダニズム 世界文学

1. 研究開始当初の背景

日本でのウィリアム・フォークナー研究は膨大で優れた実績を誇っているが、日本作家とフォークナーの比較研究はまだ少数である。もちろん大橋健三郎のフォークナー研究は、日本作家への影響にも十分目配りされた視野の広いものである。しかし、それに続くべき研究はまだ多くはない。なぜフォークナーがこれだけ日本で重んじられたのか、という問いに対しては、第二次世界大戦後にフォークナーが来日したから、というだけではすまされず、より根源的な理由があるはずだ。

研究開始当初には、「世界文学」も以前のように国民国家的な特性を示す各国文学を網羅したものを指すのではなく、マイノリティと主流派、移動性、国家権力とグローバルな市場など、全世界に共通する問題をとらえる文学に世界性を見る傾向が定着してきた。

この新たな概念を基礎にフォークナーと日本作家の共通の問題を検討し、さらにフォークナー文学が日本に紹介された経緯も考慮して、大江や中上のように日本の父権制社会やマイノリティの問題に正面から取り組んだ作家たちが、フォークナーをどう評価し、利用したか、考察する必要がある。それによってフォークナーの世界文学性を確認することができる。

2. 研究の目的

本研究は、大江健三郎と中上健次という戦後日本文学で巨人と呼びうる二人が、どのようにフォークナーに影響を受けてきたか検証する。彼らが作家として日本の伝統的な父権制社会に対すると、アメリカ南部父権制社会に対するフォークナーの批判や、それを文学という形で実践した彼の語りから多くの示唆を得ている。それを踏まえ、フォークナー文学の現代における世界性と日本での応用を、三人の作品を比較検討して明らかにする。さらに、大江と中上の間には世代格差と階級格差というべきものもあるが、彼らとその差異にもかかわらず、どうしてフォークナーから大きな影響を受けたのか、またそこにはどのような違いがあるのか、そして彼らがそれぞれどのような特徴を発展させて独自の世界を築いていったのか、見極める。そうすることで改めて、フォークナーの世界文学的な価値を認めることができよう。その際に、特に大江が第二次世界大戦直後に多感な青年時代を送った作家として、アメリカ文化との対峙にも敏感であったことに注意を払い、作家と国家の文化戦略の関係についても考察する。

3. 研究の方法

大江健三郎とフォークナーについては、大江がフォークナーの小説『アブサロム、アブサロム!』や『響きと怒り』から直接影響を受けた小説『万延元年のフットボール』に

ついて、架空の共同体の設置など、彼がフォークナーから受けた影響を検討する。さらに大江が後期作品『憂い顔の童子』、『取り替え子』など、第二次世界大戦後の自身の体験を元にしたフィクションで、アメリカの対日本文化政策を間接的に検証していることをふまえ、これらの作品で、戦後アメリカ文化が日本の知識人作家に与えた影響も考察する。

中上健次とフォークナーについては、中上がフォークナーの小説『響きと怒り』や『アブサロム、アブサロム!』から強い影響を受けた、いわゆる秋幸三部作『岬』『枯木灘』『地の果て、至上の時』を中心に取り上げ、主人公とその父の関係を、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』にみられる父子関係と比較する。その際、階級差別と人種差別の双方が絡み合っていることに注意を払う。また、中上作品の語りは文法的に破格であることが多いが、フォークナー自身の文体も複雑で読みにくいことから、二人が語る文章の複雑さの理由についても考察する。

上記二人の日本作家は、その出身、世代の違いによって当然、フォークナーの影響も違う現れ方をする。その違いから、大江と中上の問題意識の差異、特徴、それぞれの個性について比較検討する。さらにそれらの違いを超えて共通する問題意識を明らかにして、世界文学としてのフォークナーの影響を総括する。

またフォークナーは、1920年代のモダニズム全盛時代に創作活動を始め、第二次世界大戦後はその終焉に立ち会った。後期のフォークナーは、ポストモダン的な傾向があるが、時とともにモダニズムからポストモダニズムへと移行するのは、大江や中上にもみられる。フォークナーと大江の場合は、それを老年期の作家活動の特徴としてとらえることも可能である。中上の場合は46歳で病死したため老年とは言いがたいが、独特の文体にこだわった彼ら三人がポストモダニズムへと向かう理由は何か。それは文学の可能性を信じる新たな試みなのか、それとも今まで彼らが信じてきた文学の可能性への絶望による転換なのか、についても検討する。

4. 研究成果

2013年度は、中上健次がフォークナーから受けた影響について主に考察した。雑誌『フォークナー』15号に掲載した『「切手ほどの土地」 中上健次とフォークナー』で、中上の秋幸三部作『岬』『枯木灘』『地の果て、至上の時』とフォークナーの『響きと怒り』および『アブサロム、アブサロム!』をとりあげ、秋幸とその父の関係が、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』のトーマス・サトペンとチャールズ・ボンと比較できることを実証した。中上の『枯木灘』では、異母兄弟殺しが父親殺しの代理として行われており、三部作の第二作目でフォークナーの『アブサロム、アブサロム!』よりもさらに

父親との葛藤が先鋭化している。ただしその決着は『地の果て、至上の時』に持ち越される。『地の果て、至上の時』では、フォークナーへの言及が秋幸の父の台詞からも明らかで、中上は自らフォークナーの影響を認めている。しかし一方で、秋幸の父は意外にも自殺を遂げ、父親殺しは完成しない。柄谷行人は、敵としてきた父の自壊を明らかにするこの作品は中上がポストモダニズムへ移行する兆候を示すと考えているが、それはフォークナーが『アブサロム、アブサロム!』以降、徐々にポストモダニズムへ移行するのと呼応している。作品中で中上がフォークナーへの目配せをして遊ぶ瞬間があること自体、この作品のポストモダンな印ともいえる。

またこの論文では、『地の果て、至上の時』で秋幸の父が自殺する事態を受けて、『アブサロム、アブサロム!』でのサトペンの死はウォッシュ・ジョーンズによる殺人であるというより、サトペンの諦念がひきおこした自殺に近いものではないか、という新たな解釈も提案した。中上が描いた浜村龍造の自殺は、我々に翻って『アブサロム、アブサロム!』でのサトペンの死を新たに解釈させる力がある。この論文ではさらに、秋幸三部作以前に書かれた『千年の愉楽』や三部作後の『奇蹟』についても分析している。中上は『千年の愉楽』でオリュノオバという語り手を使って、路地という共同体の口承文学的な豊かな世界を披露しながら、『奇蹟』に至っては、路地解体後の荒廃した世界を老人男性の語りで描き、ポストモダニズム的な絶望の深さを示している。それはフォークナーの後期作品『寓話』の長々しい文章にどこかで共通する可能性もある。

2014年度は、“To Go Beyond Communal Narrative Constructs: The Case of William Faulkner and Nakagami Kenji”と題した論文を *Review of International American Studies* (RIAS vol.6, Spring-Fall No.1-2/2013) に掲載した。ここでは中上の短編集『熊野集』のなかの「不死」と「月と不死」という二つの短編を中心に、フォークナーの長編『八月の光』と比較した。中上がここで小説『八月の光』を意識していた、という直接的証拠はない。しかし彼らはともに父権制社会や故郷の共同体が紡ぐ神話や伝説的な物語に親しみ、かつそれらに批判的であった。また、両作家は女性嫌悪を疑われることもあるくらい、女性に対して暴力的な描写をしたり、男にとって危険な女性を描くことがある。そこでこの論文では、共同体から疎外された危険な怪物としての女と放浪する孤独な主人公の関係を比較した。両者の作品では、男女間の権力を巡るすさまじい闘争と男による女の殺害があるが、男に徹底服従を装う女にも逆転して権力を握る意思が潜み、二項対立からずれた位置にある主人公の男は、翻弄される。日本の民間伝説の聖と汚れのメビウスの転換も、西洋神話の善悪の二項

対立の解消も、必ずしも解決策とはならない。故郷の共同体が提供する、古来慣れ親しんだ物語構造によってそれぞれの父権制社会の中に取り込まれることに、中上もフォークナーも明らかに反逆している。

2014年度には続いて、ジョン・マッシュズ編でケンブリッジ大学出版局より出版された研究書 *William Faulkner in Context* において、論文“Faulkner and Japan”を書いた。ここでは大江健三郎が『万延元年のフットボール』で、どのようにフォークナーの『アブサロム、アブサロム!』や『響きと怒り』を消化し、明治時代に先駆けておこった故郷の反乱騒動と日米安保協定締結を結びつけた物語を構築したか、またその後、大江が日本の政治体制や日米関係にどのように関心を持ち続けて作品化し、今日に至っているかを解き明かした。さらに父の息子であるとともに、息子の父親であることも意識する大江に対し、あくまでも父に反逆する息子であることにこだわる中上との違いも指摘した。さらにこの論文では、フォークナーが日本に紹介された経緯と第二次世界大戦後のアメリカ文化の普及、それに対する大江ら日本の知識人の反応を考察し、戦後のアメリカと日本の関係、南部作家フォークナーとアメリカ合衆国代表としての文化使節フォークナーの両義性も指摘した。

2015年度は、8月に韓国で開催された International American Studies Association の国際会議に出席し、“Faulkner, American Book Market, and the US Cultural Policy”という題目で、フォークナーとアメリカの出版社の関係を彼のキャリア初期から後期に渡って考察し、とくに第二次世界大戦中の出版社の戦時広報活動、さらに冷戦時代のアメリカ文化啓蒙活動とペーパーバック革命におけるフォークナーの扱われ方について研究発表した。国家の広報活動、出版社本来の利益追求に翻弄されながら、他方、作家自身それをうまく利用できた面もあることを明らかにしている。またこれらの状況は、戦後日本でのフォークナー紹介、フォークナー研究にも関わることを指摘した。

2015年度は続いて、金澤哲編の『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』で「『行け、モーセ』と『老い』の表象」と題した論文を発表した。大江については後期作品でのポストモダンな傾向、中上についても『地の果て、至上の時』後の物語解体的な傾向をすでに指摘したが、ここではフォークナーの中期最後の作品『行け、モーセ』において、フォークナーが老いをどのようにとらえているかを、彼の後期作品のポストモダン的な傾向を念頭に検討した。そして老人には時空間を超える記憶の自由な往来がある、という観察が刺激となって、フォークナー自身、より自由な編集的創造力を発揮するようになった、という結論を得た。それはフォークナー

後期作品の『尼僧への鎮魂歌』や『寓話』に見られるように、事実羅列的で、かつ時空間を自在に行き来するポストモダンな文体へと発展する。中上健次は、マイノリティも体制の中に取り込んでしまう伝統的物語構造をあくまでも拒否し、次第に語りの貧しさへ意図的に逸脱していこうとする。一方、大江健三郎は同種のテーマを多様な解釈で変奏して語り、父権社会と対抗するあらゆる可能性を饒舌かつ諧謔的に提供する。こうして彼らはそれぞれ独自のスタイルを追求するようになる。しかし彼らはともに、南部父権制社会や国家に対し、絶望の沈黙の代わりにあらゆる方法で抵抗するため語り続けたフォークナーのスタイルに、今日の作家の見本を見いだしている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

田中敬子 “To Go Beyond Communal Narrative Constructs: The Case of William Faulkner and Nakagami Kenji.” *Review of International American Studies (RIAS)*、査読有、vol.6、no.1-2、2013、pp.93-109、<http://iasaweb.org/publications/rias.html>

田中敬子 「『切手ほどの土地』 中上健次とフォークナー」、『フォークナー』、査読無、15号、2013、pp.91-105

〔学会発表〕(計 1 件)

田中敬子 “Faulkner, American Book Market, and the US Cultural Policy”、International American Studies Association、2015年8月17日、ソウル(韓国)

〔図書〕(計 2 件)

田中敬子 他、松籟社『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』、2016、pp.131-56

田中敬子 他、Cambridge University Press、*William Faulkner in Context*、2015、pp.279-87

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中敬子 (TANAKA, Takako)
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・
名誉教授
研究者番号：70197440

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：